

べき問題なのではないか。「民話」が、そうであったとするなら、それに冷淡であった民俗学は、当時既に自らのディシプリンのなかに閉じ始めていたといえるかもしれない。

そして川村は最後に、改めて「口承」という問いの位置について、民俗芸能と併置しながら、次のようにまとめた。

民俗学が今後、もし解体してしまうことがあったとしても、口承は、単なる会話や談話に還元され得ない、話し手と聞き手との交渉の場、すなわち能動的で包括的な関係性が形成されつつその関係性自体が常の上書きされていく場の可能性として存在し続けるだろう。それは、現在命脈を保つ民俗芸能が、文化財としての経済的庇護やナショナルな意味づけによってではなく、その芸能に根源的な誇りと喜びを感じる演者と見る者の存在に依存していることとかさなりあっている。

また、フロアからは、民話運動の象徴的な成果である木下順二の『夕鶴』が、鈴木棠三の資料集に収められた鶴女房を素材に既に戦中から構想されていたことなどを踏まえると、民俗学と「民話」の関わりについては、戦前・戦中を含めた長い時間の幅で見る必要があるのではないか、という「民話」を一九五〇年代なかでのみとらえるべきではないとする意見などが出された。

「民話」をめぐる問題は、今後、文学、思想史、歴史学など各分野で進むと考えられる一九五〇年代研究とも連動しながら、幅広い視野で検討する必要がある。

(しげのぶ・ゆきひこ／国立歴史民俗博物館客員)

#### 第六四回研究例会

### 二年目の「3・11」から

—「聴く」「語る」そして「記す」…  
「伝える／伝わる」をめぐって—

根岸 英之

二〇一三年三月二三日に立正大学で開催された「第六四回研究例会」は、二〇一二年三月に行われた第六二回研究例会「三一一年後から」<sup>1)</sup>を継承しつつ、東日本大震災から二年後、本会がどのように震災を主題化できるかを考える例会として、日本民話の会と共催の形で実施された。企画は、例会委員の重信幸彦氏と、本会会員であるとともに日本民話の会会員でもある米屋陽一氏によって進められた。

重信氏による例会のお知らせの趣旨文は、以下のとおり。

（今回の例会は、日本民話の会と共催で実施します。日本民話の会では、「3・11」の震災で被災した方々への聞き書きを実施するとともに、過去の災害の伝承を再発見・再評価し、それらを〈声〉と身体を使った「語り」をとおして「伝える」という実践を具体化し始めています。

「3・11」のような出来事を、後世にいかに「伝えるか」と

という問題については、学も実践も、ともに同じ土俵に立つことになります。

聞き書きを通して触れた当事者のことば、そして改めて再発見した過去の災害の伝承、それらを〈声〉と身体を使った「語り」をおして「伝える」という実践を始めた日本民話の会のメンバーにご登壇いただき、語りを上演するとともに、それぞれが「3・11」以後に感じ、考え続けていること、経験したことなどについてお話しいただきます。

そして改めて、「伝える／伝わる」ということについて考える場にしたいと考えています。

ことばを絶する他者の体験を第三者がいかに語ることができなのか、過去の「美談」を今改めてリアルな知恵と教訓としてどのように語り直すことができるのか、それらは、決してやさしい問題ではありません。しかし、先の戦争の例を持ち出すまでもなく、出来事は確実に時間のかなたに遠のき、その身体に記憶を宿した当事者たちは、確実に居なくなっていくまま。

「伝える／伝わる」は、そうした長い時間の幅のなかで、考え続ける必要があります。

そして「伝える／伝わる」ための道具Ⅱメディアは、文字や映像ばかりではなく、生身の〈声〉と身体という道具Ⅱメディアも大きな可能性を持っているはずでした。その可能性を深く問うていくことは、「話」そして「口承」という問題を考え続けてきた私たちにできることの一つなのではないでしょうか。

当日は重信氏が、残念ながら体調の関係で欠席された。本報告が重信氏によりまとめられれば、当初目指した意図まで深まることになるのだろうか、例会委員の一人としてコメントーターとして関わった立場から、報告の責を追うものである。

当日の内容は、以下のとおり。

#### 【基調報告】

米屋陽一「何のための学だったのか」

#### 【談話と上演】

大平悦子「被災者の体験を語ること＋上演」（日本民話の会）

矢部敦子「稲むらの火」を語りなおす＋上演（日本民話の会）

#### 【上演】

荒石かつえ「紙芝居 稲むらの火」（日本民話の会）

#### 【コメント】 根岸英之

【司会】 中村とも子、繁原史

米屋氏は、震災以降、太平洋沿岸の被災地を巡って「歩く・見る・聴く・考える」ことを実践しており、今回はとくに、宮城県石巻市立大川小学校の悲劇の具体例などを紹介。そして、「地震・津波の「伝承」活動は、「学習」活動そのもの。どのように、「伝承」「学習」を繰り返していくのか。どのように、「個人」「家庭」「学校」「地域」が生きる知恵を共有していくのか」

を「とりあえずのまとめ」と提起。さらに、学問研究が本になっても活かされなければ意味がない。学問研究とは、人々の幸せにつながっていくものであり、ただ資料集を作るということでなく、未来に向かっての発信に取り組んでいくことが重要だと総括した。氏を中心に編まれた『聴く語る創る第二十一号 特集 東日本大震災を語り継ぐ』（二〇一三 日本民話の会）は、その一つの実践のあり方といえよう。

大平氏は、岩手県遠野市で生まれ育ち、川崎市で教職を務める傍ら、日本民家園などで「遠野の語り」を実践している現代の語り手。氏は、柳田國男『遠野物語』第九九話の津波の話、自身でも遺族から聴き継いだ話などを織り交ぜながら、語りとして実演。氏は、語りを繰り返していく中で、この話の主人公の男は、妻の幻を見ることで妻の死を受け入れることが出来るようになったのではないかと、話に対する解釈が深まってきたと述べた。ここでは、『遠野物語』という「書かれた」伝承が、再び「語り」というパフォーマンスに再生する過程や、繰り返し語られることによる語り手の解釈の変容などが浮き彫りにされ意義深かった。氏はまた、大船渡市の女性の東日本大震災での体験談を、伝聞談としても語った。これは、他者の体験をどう語り継ぐか、近年の語りの動向に見られる「パーソナル・ストーリー」<sup>(2)</sup>とも重なる語りの有りようとしても興味深かった。<sup>(3)</sup>

矢部氏は、和歌山市生まれで、主に祖母から聞いた語りを、東京で語り継いでいる現代の語り手。「稲むらの火」として知

られる津波伝承が、矢部家では、「地震があったときの教訓話」的に聴かされたこと、また津波の後、主人公が自らの資財を提供して地元民と堤防を築いたという「偉人伝」的に聴かされたことを、和歌山弁での語りとともに実演した。氏の語りは、災害伝承がどのように伝承されてきたのかの具体例であるとともに、東日本大震災以降、語りのレパートリーとして、新たに再認識された点などにも触れられ、米屋氏の提起した「伝承」の語り継ぎの例としても、説得力のあるものだった。<sup>(4)</sup>

荒石氏の紙芝居は、市販の紙芝居を使った上演であったが、幼少期の釧路で実体験した地震と津波の様子を枕に演じられたため、市販の紙芝居であっても、語り手の想いが込められて伝えられることを実感できた。一般に知られた内容に基づく紙芝居は、矢部氏の語りとの相違も比較するものともなった。<sup>(5)</sup>

その後、根岸から、震災体験を語り継ぐことは、「生活譚」という概念や、柳田國男編『山村生活の研究』（一九三七 民間伝承の会）での質問項目「村の大事件」などへと、学史的にも展開できるのではないかとという点などについてコメントした。<sup>(6)</sup> また、それぞれの語り手への質問の中で、今回上演された話は、東日本大震災以降、新たに「語り」の対象として意識化されていった点や、繰り返し語ることで語りにも変化があることなどが浮き彫りになり、「語り」の動態を共有することもできた。今後の課題としては、鷺田清一氏の指摘する東西の語り文化の相違という点が、震災を語る側面についても見られると

思われ、そうした点を、学会としても研究していったらいいのではないかと述べた。<sup>(8)</sup>

フロアを交えた討議の場では、福島県いわき市に住みながら民俗学に関わる方から、原発特需で変貌していく人々の暮らしぶりや心性のあり方を、どう捉え対象化していったらいいか苦悩している、といった発言なども出され、改めて今回の「問い」が、フィールドにおける実践と真正面から切り結んでいく必要性のあるものであることが、顕在化された例会となった。

注

- (1) 「例会記録／第六二回研究例会 三・二一 一年後から」『口承文芸研究』三六 二〇一三
- (2) 櫻井美紀「パーソナル・ストーリーとは？～家族のこと、知人のこと、自分のことを語るストーリーテリング」『語りの世界』三六 パーソナル・ストーリー』二〇〇三 語り手たちの会
- (3) 大平氏の語りについては、日本民話の会編『新しい日本の語り』6 大平悦子の遠野ものがたり』二〇一三 悠書館、大平悦子編「岩手県三陸沿岸の被災地を歩く」『聞く語る創る第二十一号 特集東日本大震災を語り継ぐ』二〇一三 日本民話の会を参照
- (4) 矢部氏の語りについては、日本民話の会編『新しい日本の語り』1 矢部敦子の語り』二〇一二 悠書館、矢部敦子「家族に聞いた「稲むらの火」石井正己編『震災と語り』二〇一二 三弥井書店を参照
- (5) 荒石氏の語りについては、日本民話の会編『新しい日本の語り』3 おかつ新三郎ふたり語り』二〇一三 悠書館を参照
- (6) 拙稿「地域おこし・民話運動・生活譚―地域の暮らしぶりをまなざす（口承）の営み」『世間話研究』二二 二〇一三
- (7) 鷺田清一・赤坂憲雄『東北の震災と想像力』二〇一二 講談社
- (8) 鷺田「関西には独特な語りのおくせがある。いかに悲惨なことでも「泣き笑い」で語り、相手を面白がらせるというサービスである。(略) 東北にも別の語りの伝統がある。遠野の民話、宮沢賢治の童話、「難しいことを易しく、深いことを面白く」という井上ひさしの語り(略)。その語りの伝統が、このたびの苦難の語りのなかで活きることを祈っている。」
- (8) 会員向けの報告として、繁原央「第64回日本口承文芸学会 例会報告」『伝え』五三がある。  
(ねぎし・ひでゆき／市川市文学ミュージアム)